

「国語の力」の成立過程

— 国語教育学説史研究 —

野地潤家

一四 (つづき)

「国語の力」の第五章「国文学の体系」には、夏目漱石の講演記録「作家の態度」から、二三の引用がなされている。

たとえば、第二節「認識の統一」には、漱石の「作家の態度」から、つぎのように引かれているのである。

「文学の本質に就いてはこゝに詳しくいう余裕がないのであるが、唯こゝに必要な点のみを挙げていえば、『文学の本質』を、その根源に於てこれを神といい、生命といい、人性といい、何々といひ換えることは素より少しも妨げない。併しながら時と処と人を離れて高次のなる立場から見ると、作品の内面を一貫する精神は、常に人性の紛糾を統一して統一を求むる作用の無限の連続であるといふことを否む何等の理由も見出されない。即ち文学の本質は普遍を憧憬する精神の持続的展開であり、精神の混沌を克服して晴朗なる心境を翹望する精神の進展に外ならぬ。文学を読むのは此の如き永恒的なる形象の流動を読むことである。夏目氏が作家の態度を論じた中に、真摯に道を求むる心が常に懐く無限の憧憬を説くに

『時鳥平安城をすぢかひに』の句を用いて、『おやという中に時鳥も筋違も消えてしまふが、平安城すぢかひすぢかひにすぢかひという瞬間の働きを、さも永久の状態の如く保存に便にするようにまとめる。こうした考が頭の中にたまって広くなり深くなると、この全体の気分に応じたものを客観的に捻出しようとする。あゝでもない、こうでもない、と悶くようになる。そうすると、無限の憧憬とかななるのであろう。』といわれた比喩もおもしろく思う。時鳥は勿論、平安城も交まってしまつても、筋違いに飛び去つた声は、永久の今に生きて、鮮かに響いて居る。文学の本質は常に文化が未完成の状態でそれを持続するように、無限の憧憬に生きて連続する。文学を透して読もうと思ふものは、その内面を貫いて儼存することの本質である。而して我々が文学の読方を考えるのは、本質の読方を探求するのである。読む前に、自己を深め高うせんと欲する必要の要求から追ひ立てられて文学に向うに外ならない。読むことはその作用に依りて新しい人格と文化との創造に参加することである。』（有朋堂版「国語の力」、二三七—二三八頁）

右の文章中の「作家の態度」からの概括引用は、漱石の講演記

録「作家の態度」のつぎのような部分（段落）からなされたものである。

「我々是我々の気分（主観の内容）を非我の世界から得ます。然し非我の世界は器械的法則の平衡を持って始めて落ち付くものであります。もし此平衡を失えばすぐに崩れて仕舞います。従つて自分がこう云う気分になりたいと思つた時に、其気分を起してくれる非我の世界の形相が具つて居らん事があります。つまり非我の世界を支配する器械的法則が我の気分に応じて働いては呉れません。そこで此法則の運行と自分の気分と、合体した時、即ち自分がかくなりたいと兼々希望していたかの如き気分を生ずるときの非我の形相を、常住の公式に解釈しようとするのが我々の欲望であります。例えば時鳥平安城を筋違にと云う俳句があります。平安城は器械的法則の平衡を保つて存在して居るのだから、そう無暗に崩れてはしません。それすら明治の今日には見る事が出来ません。況んや時鳥は早い鳥であります。又其の鳥が筋違に通る所も、始終はありませぬ。おやと云ううちに時鳥も筋違も消えて仕舞います。消えて仕舞う以上は其の時の気分になりたくても一寸なれないから、平安城を筋違にという瞬間の働きをさも永久の状態のごとく、保存に便にする様に纏めて置きます。楮斯様に纏つた気分が（客観的に云うと形相）段々頭のなかへ溜つて参ると仮定します。そうして夫が入り乱れるとします。広くなり深くなると見ます。すると一種奇妙な気分になります。此の気分を構成するの一部は、非我の世界に之れに相応する形相を発見しもしくは想像する事が出来ませんが、此の全体の気分に応じたものを客観的に捻出ししようとすると到底駄目でありませぬ。花でも足りない。女でも面白くない。あゝでもない、こ

うでもない、ともかく様になります。之を形容して、よく西洋人坯の云う口調を借りて申しますと、無限の憧憬 (infinite longing) とかになるでしょう。私は昔し¹⁴大学に居つた頃此字を見て何の事だか分りませんでした。それでも難有がって振り廻していました。今でも実は分りません。私は解釈文は出来ませんが、本当の所 infinite longing と云うものを持つていないのだから、是非も御座いません。然し私の様に説明すればともかくも形容の詞なので、それで差支御座いますまい。とにかく、そんな形容を使わなければならぬ気分が起りまして、煩悶致します。煩悶してどうか発表したいとするが発表出来ない。出来ないで仕舞は夫迄であります。せめて不完全ながら十の一でもあらわそうとすると、是非とも象徴に訴えなければなりません、十のものを十丈あらわさないで—あらわさないと云つては間違になります。あらわせないのです。で巳を得ず一丈にして巳めて置く叙述であります。無論気分を気分としてあらわすなら、大に悲しいとか少々嬉しいとか云う丈で、始めから表わせる表わせないの議論をする必要がないのですが、此深い様な広い様な複雑な様な気分の対象を、客観的なる非我の世界に見出そうとすると十の気分を一の形相で代表させて、残る九は此象徴を通じて思い起す様にしなければなりません。然しながら元来之は本人すら無理な事をしてるので、他人には余程通用し悪くなる訳であります。一を聞いて十を知ると云う事がありますが、一を見て十を感ずる人でなければ出来ない事です。しかも一を見て十を感ずる、其感じかたが、云いあらわした本人と一致しているかどうかに至ると甚だ六づかしい問題であります。要するに象徴として使うものは非我の世界中のものかも知れませんが、其の暗示する所は

自己の気分であります。要するにおれの気分であつて、非常に厳密に言ふと他人の気分ではない、外物の気分では無論ない。と云う傾向のある所から此種の象徴を主観的態度の第三段に置いて、数学の公式杯の対と見立てました。(シモンズの仏西蘭の象徴派を論じた文のなかに、こんな句があります。『我々が林中の木を一本々々に叙述するの煩を避けて、自然を怖れて逃がれとすが如くもてなすと、驚自然に近くなります。又普通の俗人は日常の雑事を捉えて実在に触れていると考へて居りますが、是等の煩瑣な事件を掃蕩して仕舞うと、蓋人間に近くなるものであります。世界に先つて生じ、世界に後れて残るべき人間の本体に近づくものであります』此人は又カーライルの語を引用して居ます。『真正の象徴は明らかに又直接に、無限をあらわして居る。無限は象徴によつて有限と合体する。眼に見える様になる。恰も逢せらるゝかの如くに見える』此二人の言葉は多少 infinite longing と同じく、聊か形容の言葉の様に思われますが、御参考の爲にこゝに引いて置きます。』(雑誌「ほととぎす」、明治41年4月1日、ほととぎす発行所刊、三九〇—四二〇、傍線部は引用者。)

垣内松三先生の「国語の力」への引用は、右の文章に付した傍線部との照合によつてもわかるように、原文そのままではない。漱石みずからは、「無限の憧憬」(infinite longing) についても、確信をもつて論じているのではない。ほんとうの所、infinite longing というものを持つていないとも述べている。垣内先生は、「真摯に道を求むる心が常に懐く無限の憧憬を説くに」と述べられ、要約引用をしつつ、無限の憧憬とかなるのであると、一応「無限の

憧憬」へ落ちつかせるようにしていられる。本来、垣内松三先生が、「国語の力」のこの個所で強調したかったのは、「文学の本質」とはなにかということであつた。すなわち、「文学の本質は普遍を憧憬する精神の持続的展開であり、精神の混沌を克服して晴朗なる心境を翹望する精神の進展に外ならぬ。」とし、「文学の本質は常に文化が未完成の状態でそれを持続するように、無限の憧憬に生きて連続する。文学を透して読もうと思ふものは、その内面を貫いて儼存することの本質である。」とするのである。

漱石が「無限の憧憬」(infinite longing) を、かなり柔軟に論じており、非我の世界(形相)に我々の気分について考察しつつ、象徴を論じているのに対して、垣内松三先生は、「無限の憧憬」を文学の本質の問題としてのみ切り取つて見られるところが見られる。それはいかにも垣内好みの断章のしかたである。

「創作家の態度」は、明治四十一年(一九〇八)二月一日、神田の青年会館における朝日講演会においてなされた講演であつた。その講演記録は、訂正をへて、「ほととぎす」(明治四十一年四月一日)四月号に掲載された。この講演記録については、小宮豊隆氏が「『創作家の態度』も亦、漱石の『文学論』の継続である」とうことが出来る。ただこれは「作物の批評」に対する『写生文』の場合のように、概念的であるよりも各論的な内容を持つて居る。しかもこれが、当時文壇に流行していた自然主義論に対する批判を目標として居る点では、『文芸の哲学的基礎』と同じように、これは学問的であるとともに、社会批評的な内容を持つて居るものであつた。同じ性質のものに又、ここに採録されてはいないが、後の講演『文芸と道徳』がある。しかもこれらの三つのものは、漱石の根本

的な自然主義論といふべきものである。当時文壇では、いろいろな人によつていろいろな自然主義論が述べられているが、しかし漱石ほど徹底的に心理的に倫理的に自然主義に就いて考えた人はなかつたと言つていい。」（『漱石全集』第二十卷、昭和32年2月27日、岩波書店刊、二六四―二六五）と述べている。

つぎに、「国語の力」第五章「国文学の体系」、第四節「動機と態度」においては、「創作家の態度」から、左のように引かれてい

る。「こゝに動機というのは、フランスに於ける擬古典主義、イギリスに於ける古典文学の勃興、イギリスに於ける浪漫主義というような題目を取扱うのであるが、右二氏はキョルチングの『文学思潮』をそれと同じ意味に用いて居る。然しこの間にはなお考えて見るべき問題がある。たとえば夏目氏の『創作家の態度』に於て明かに動機を否定して、『作物を区別するのに、ある時代の、ある個人の特性を本として成り立った某々主義を以てする代りに、古今東西に涉つてあてはまる様に、作家も時代も離れて、作物の上のみあらわれ特性を以てする事でありませう』という時には、ムーブメントと異つた『作物の上の特性』が現われる。」（有朋堂版「国語の力」、二四二―二四三）

また、同じ節の後半に、左のようにも引かれている。

「然らばムーブメントの外に、尚お別に文学の読方の見当づけとして

7 文学思潮

を考へることが出来る。而してそれは動機が他の全てを含むよう

に、その『動機』（動機・創作主義を歴史的反映の中に見るのでなく、其は相互に補充として協同して『文学』を完成せしむる作用の作用であるとして）をもこの中に含む時に、各国国民文学の歴史的展開のみならず、『文学それ自体』の展開も此立場に於てその作品から読むことができるのではあるまいか。而して夏目氏が、『結果と見らるべき作物を棄てて原因と認むべき或物の方から説明し、溯る代りに流を下つて来る方が善い訳になります。つまり角があるから牛で、鱗があるから魚だという代りに、発生学から出立して、どんな具合に牛が出来、どんな具合に魚が出来るかを究めた方が、何だか事件が落着いた様な心持が致します』といい、モウルトンが、文学史は『歴史』でない、『展開』であると考えて居る如く、文学の本質の読方はこの立場に於て始めて生々した作用となるのである。」（有朋堂版「国語の力」、二四三―二四四）

右に引いた二つの部分は、漱石の講演記録「創作家の態度」のつぎの段落から採られたのである。

「（四）もう一つ申して本題に入る積りではありますが、是は純粹なる歴史的研究とは云えないかも知れません。今迄述べた三ヶ条はみな文学史に連続した発展があるものと認めて、舊を棄て、漫りに新を追う弊とか、偶然に出で来た人間の作の爲めに何主義と云う名を冠して、作其物を是非此主義を代表する様に取り扱つた結果、妥当を欠くにも拘らず之を飽く迄も取り崩し難きwholeと見做す弊や、或は漸移の勢につれて此主義の意義が変化を受けて混雑を来す弊を述べたのであります。こゝに申す事は歴史に関係はありますが、歴史の発展とは左程交渉はない様に思われます。即ち作物を区別するのに、ある時代の、ある個人の特性を本として成り立った某々主

義を以てする代りに、古今東西に涉つてあてはまる様に作家も時代も離れて、作物の上にのみあらわれた特性を以てする事でありませぬ。

既に時代を離れ、作家を離れ、作物の上にのみあらわれた特性を以てすると云う以上は、作物の形式と題目とに因つて分つより外に致し方ありません。まず形式からして作物を区別する詩と散文となりませぬ。是は誰でも知つている事で改めて云う程の必要も認めませぬ。詩と散文と区別したからと云つて創作家の態度が髣髴しくいのです。分けないより増しかも知れないが、分けた所で大した利益も出て来ない様です。次に問題からして作物の種類別をすると先ず出来事を書いたものを叙事詩（是は希臘の作を土台にして付けた名だから、我々は叙事文と云つても構いません）と名づけたり。自己の感情を詠じたものだから叙情詩（是も叙情文としてもよろしい）と申したり。性格を描いたり、人生を写したりするんで小説とか戯曲とかの部類に編入したり。或は静物を模写するんで叙景文と号する様な分類法であります。此分類になると多少細かになりますから、詩と散文の区別より幾分か創作家の態度を窺う事が出来て、随分重宝ではあります。是れとも与えられた作物を与えられたなりに取り扱う事で、其特性を概括するにとゞまらば仕舞いやすいから、夫より以上に溯つて、もう少し奥から、こう云う立場で、こう変化すると小説が出来る、こう変化すると叙情詩が出来ると迄は漕ぎ付けていないのが多い。そこ迄漕ぎ付けない以上は、頭から、結果と見られべき作物を棄て、源因と認めべき或物の方から説明して、溯る代りに、流を下つてくる方が善い訳になります。つまり角があるから牛で、鱗があるから魚だと云う代りに、発生学から成立して、どんな具合に牛が出来、どんな具合に魚が出来るかを究めた

方が、何だか事件が落着いた様な心持が致します。

私が創作家の態度と題して、歴史の發展に論拠を置かず、又通俗の分類法なる叙事詩叙情詩等の区別を眼中に置かないで、単に心理現象から説明に取りかゝろうと思ふのは之が為めでありませぬ。（雑誌「はとぎす」、一八一―一九六、傍線は引用者。）

ここで注意すべきは、垣内松三先生が、漱石の立論の流れにそうて、その論旨をそのまま踏まえるのではなく、みずからの論旨に引きつけていられることである。漱石においては、「作物の上の特性」にも明らかに限界があることを指摘しているのであるが、「国語の力」においては、「動機」を否定して、「作物の上の特性」によるところに重点がおかれているごとくである。

後者（「結果と見らるべき作物を……」）も、漱石は、創作家の態度を見ていくための見方の一つとして提起し言及しているが、「国語の力」においては、「文学思潮」という視点から、文学の本質を読んでいくための、一つの見方として引かれているかのようである。

漱石の講演「創作家の態度」においては、本論にはいる前に、歴史的研究の持つている弊、欠陥、危険さについて、相当精細に指摘しているのであるが、右の引用は、その検討の四番目の項からなされてはいる。漱石にあつては、「態度」研究のための前提としての吟味、討究であるが、「国語の力」にあつては、いささか部分的な援用になつてはいる。

つぎに、「国語の力」第五章「国文学の体系」の第五節「文学思潮の意味」には、漱石の「創作家の態度」から、左のように引用さ

れている。

「文学思潮は文学の所謂内容の展開を語るものでない。それであるから、いうまでもなく文学の考古学的研究、又は文献学的研究でもない。文学の研究の対象は文学自体である。併しながらもし研究の便宜上『文学』の哲学的研究を文学思潮の研究というならば、文学の芸術的研究を、文学形象の形態学的研究ということも可能であるが、文学の研究は徹頭徹尾、表現を透して形象の流動を解釈することである。故にその態度は却って形式的研究である。漫然として文学の素材の分析的研究を試みるのでなくして、環境・作者・類型・動機の研究を終えてから、一語一句の微をも見落さない注意の下に行わるゝ形式的研究である。『フォルム』の語源が『内視』を意味し、『典型』を意味する意味に於ての『形式』であり『形式的』である。

夏目氏が『我々の心を幅のある長い河と見立てると、此幅全体が明らかなるものではなくて、その中のある点のみが顕著になって、そうして此が顕著になった点が入れ代り立ち代り長く線を沿うて下って行く訳であります。そうして其顕著な点を連ねたものが、我々の内部経験の主脳で、此経験の一部分が種々な形で、作物にあらわれるのであるから、此焦点の取り具合と続き具合で創作家の態度もきまる訳になります。一尺幅を一尺幅だけに取らないで、其中の一点のみに重きを置くとすると、勢い取捨ということが出来て参りません。そうして此取捨は我々の注意（故意もしくは自然の）に伴って決せられるのでありますから、此注意の向き案排、もしくは向け具合が即ち態度であると申しても差支なからうと思ひます」（『創作家の態度』）といわれたのは、単に一創作家の態度のみではなく、

作家の個性を貫いて無限に流動する幅のある長い河の連続の姿も亦この外にはない。文学の展開は作家の注意の向け方によって明かにされ具象化された焦点の連続である。日本文学思潮の読方は此の如き持続的展開を視ることに外ならぬ。」（有朋堂版「国語の力」、二四四—二四五頁）

さて、講演記録「創作家の態度」においては、右の引用部分の直前の段落に、左のように述べられている。

「斯様に我と非我とを区別して置いて、夫から我が非我に対する態度を検査して懸ります。心理学者の説によりますと、我々の意識の内容を構成する一刻中の要素は雑然老大なものでありまして、其うちの一点が注意に伴れて明瞭になり得るのだと申します。是は時を離れて云う事でありませぬ。前に一刻中と云つたのは、まあ形容の語と思つて頂けばよろしい。例えば私が此演壇に立って一寸見廻わすと、千余人の顔が一度に眼に這入る。這入つたと云う感じはありますが、何となく同じ顔で、悪く云うと眼も鼻も揃つて居ない人が並んで御出になる。あなたがち私が度胸が揺らないで眼がちら／＼する許ではない。こう漠然たるのが本来で心理学者の保証する所であります。然し此際は不幸にして、別段私の注意を惹くものがないから、只漠然たるのみで、別に明瞭なる所がありません。もし演壇のすぐ前に美しくしい衣装を着けた美しくしい婦人でも居られたら、その周囲六尺許りは大いに明瞭になるかも知れませんが、惜しい事に御出にならんから、完全に私の心理状態を説明する訳に参りませぬ。そこで此漠然たる限界の広い内容を意識界と云つて、其のうちで比較的明瞭な点を焦点ともうします。これは前申した通り時間の経過に重きを置かない simultaneous の場合であります。時間を経

過上に就ても同様の事が申されます。然し之を説明するとくどくなくりますから略します。又想像で心に思い浮べる事物も略同様に見做されるだろうと考えますから略します。夫から前に申した例は単に分り易い為めに視覚から受ける印象のみに就て説明したのでありますから、実際は非常に区域の広いものと御承知を願います。」(雑誌「ほととぎす」、二二―二二頁)

また、「國語の力」に引用された部分の直後には、「(注意そのもの、性質や発達は茲には述べません)」とあり、すぐつぎのよう
に例を挙げて説かれてゐる。

「私が先年倫敦に居った時、此間亡くなられた浅井先生と市中を歩いた事があります。其時浅井先生はどの町へ出ても、どの建物を見ても、あれは好い色だ、これは好い色だ、と、とう／＼家へ帰る迄色尽しで御仕舞になりました。流石画伯丈あつて、違つたものだ、先生は色で世界が出来上がつてると考へてゐるんだなと大に悟りました。すると又私の下宿に退職の軍人で八十許になる老人が居りました。毎日同じ時間に同じ所を散歩をする器械の様な男でしたが、此老人が外へ出ると蛇度杓子を拾つて来る。尤も日本の飯杓子の様な大きなものではありません。子供の玩具にするブリッキ製の匙であります。下宿の婆さんに聞いて見ると往來に落ちてゐるんだと申します。然し私が散歩したつて、未だ嘗て落ちていた事がありません。然るに爺さん丈は不思議に拾つて来る。そうして、これを叮嚀に室の中へ並べます。何でも余程の数になつて居りました。で私は感心しました。外の事に感心した訳でもありませんが、此爺さんの世界観が杓子から出来上つてゐるのに對なからず感心したのであります。是はたゞに一例であります。詳しく云うと講演の冒頭に述べた

如く十人十色でいくらでも不思議な世界を任意に作つて居る様であります。中にもカントとかヘーゲルとか云う哲學者になると到底普通の人には解し得ない世界を建立されたかの如く思われます。」

(同一雑誌「ほととぎす」、二三頁)

漱石の講演がいかにか精密で周到であつたかを、右の部分を読むことによって、うかがうことができる。具体例を巧みに挙げていくのなども、堂に入つて、自在をきわめてゐる。垣内松三先生が、「國語の力」に、そのまま引用されたのは、文學の展開、文學思潮の展開を説くのに、もっともふさわしく、もっとも好都合であると判断されたからであらう。

垣内先生は、「作家の個性を貫いて無限に流動する幅のある長い河の連続の姿」をとらえようとし、「文學の展開は作家の注意の向け方によつて明かにされ具象化された焦点の連続である。」と見られた。こうした文學展開觀の成立には、漱石の創作態度論が一つの役割をもつたと思われる。

さて、「國語の力」第五章「國文學の体系」の第六節「日本文學の歴史的研究」においては、當時の研究のありようが、つぎのよう
に批判的に述べられていた。

「以上の立場から見ると、日本文學の歴史的研究は今なお政治史的・書史的・列伝的・類型的排列であつて、その本質の展開を讀む態度を取つて居ない。『筋かひに』を聴こうとするのでなく、

『平安城』を測定して居るのであり、『時鳥』を調べて居るのである。而して手續の中に目的を忘れるものである。勿論、これまでの研究に於て、手續として測定しなければならぬことが完備して居る

というのではない。各国の文学研究に於て便利を感じるグルンドリスやエンチクロペデアが整頓されて居ないのは、この上もない遺憾である。故に手続の完備の方に努力する人は、多くは機械的努力に依りてまとめらるゝこの方面の研究の速度を加えることに力を注ぎ、多くの人がいつまでも手続の調査に煩わされることから解放されるようにしたいものである。併しながらそれを須ちて始めて研究が遂行せらるゝのではない。却つて日本文学の全面的展開を讀もうと欲する心の奥から、自然に整理せらるゝ方法的準備であるということもできる。研究の現状に於ては、日本文学の本質の展開を讀む心の方が却つてその為に圧迫せられて、生々と作用することのできない歪んだ形を示して居る。日本文学と世界的文学（ある作家の作品はその優れたる価値を含むほど一国民的文学でなく、世界の人の讀みものである。我々も現在に於ては多くのかゝる讀みものを世界の人人々と共に所有する）との間に隔てを設け、文学言語の研究の仕方にてさえ、全く異つた態度を示して居るのは、方法的考察が過まって居るからである。そのために、人性の教養と文化の創造に於て、最も自由なるべき天地が、霧に掩われて居るような感じがある。日本文学思潮の流れに沿つて、広々した大洋に浮ぶように『世界文学』の概念に赴かんとする晴やかな心を堰き止めて居ることは、文化意識の深化向上の上に、どれくらい大きな妨をなして居ることか知れぬほどである。」（有朋堂版「国語の力」、二四五—二四七、傍線は引用者。）

ここでは、当時の日本文学の歴史的研究に対して、かなりきびしい批判がなされている。そのことを述べるにあたり、さきに、第二節「認識の統一」の論述に引かれた、漱石の言及した「時島平安城

をすぢかひに」を、再び右の傍線部のように引いているのである。「——、その本質の展開を讀む態度を取つて居ない。『筋かひに』を聴こうとするのでなく、『平安城』を測定して居るのであり、『時島』を調べて居るのである。」と、文脈の中にごく自然に漱石の扱つていた「筋かひに」の句が織りこまれるところに、垣内先生の漱石への親しみかたがうかがわれる。「筋かひに」を聴く——そこに垣内松三先生の作品鑑賞の独自の志向があつた。文学の本質の展開に迫つていく——それを目ざしていたのであつた。

以上、「国文学の体系」を論じていくのに、二「認識の統一」、四「動機と態度」、五「文学思潮の意味」、六「日本文学の歴史的研究」など、その初めの部分に漱石の「創作家の態度」から引かれているのは、注目してよい。講演記録「創作家の態度」の本来の趣旨そのままに採られているのではない。垣内松三先生みずからの文学思潮観、文学の本質の讀みかたを説述していくのに、モウルトンと並んで漱石がよく頼りにされているのである。漱石への傾倒ぶりも、おのずとかがわれる。

東京女子高等師範学校時代、垣内松三教授に「修辞学」などの授業を受けた、三浦ひろ氏は、そのころ（大正五年八一—六一六）のことについて、つぎのように回想している。

「修辞学は私は一年間おならいしてもとうとう解らなくて終つてしまいました。今日こそお話が解つたかなとかすかな希望をもってみることもありました。よく夏目さんのものを例にしてお話を進めたいなさいました。中でも眞美人草の宗近さんや甲野さんの言葉は

よく先生のお話に上りました。草枕、三四郎などもひき合いに出されました。けれども其の頃の私は、小説を読むことは罪悪みたいに考えている家庭に育ったので、小説と名のつくものは、徳富さんの『黒い目茶色の目』しか知らないもので、どんなに例をあげて下さってもぼんやりと想像しているだけで余けい理解しにくかったのかと思いますが、私以外にも私のような仲間があって、十分の休みなどに、どうしたら先生のお話が解るようになるのかしらと一生懸命考え合ったこともありました。今は虞美人草も草枕も門も猫も、みんな読んでいますが、先生が其の時何をおっしゃったのかはどうしても思い出せません。」(雑誌「同志同行」第6巻第11号、昭和13年2月1日、同志同行社刊、「有難い先生」、一〇八ペ)

授業中に紹介・引用されたのは、右の記述によれば、漱石の小説の類が多かったようである。漱石作品へどのように親炙されたかもわかるような気がするのである。

「国語の力」第五章「国文学の体系」の講述にあたり、漱石の講演記録「創作家の態度」から数多く引かれていたのは、すでに見えてきたとおりである。文学の本質とはなにかを求めていた垣内松三先生として、精緻をきわめ、創見に富む、漱石の文芸観・創作観に深い関心を注がれたのは、むしろ当然である。漱石の文学観が、既成の主義ないし固定した形態から出発することをせず、文芸(創作)行為の心理的事実ないし過程を解析し把握することに発しているのも、垣内松三先生の求められたところと合致しているかのごとくである。むろん、漱石への親炙・傾倒による漱石からの影響を無視するわけにはいかぬ。その影響下に、文学の本質を自力でつかんでいくこととする気概は、じゆうぶんに認められるのである。

(昭和43年4月21稿) (本学教授)